

2022年  
2月

# マナ通信



今月のマナ通信は、  
◎12月の聖書日課（ヨハネの黙示録、ヨハネの福音書）  
◎土・日曜日の学び（救い主の誕生）の感想です。

## 聖歌513番「イエスのみうでに」

### 聖歌513番 【イエスのみうでに】

①イエスのみうでに そのみむねに  
静かにいこう われはやすし  
あまつ 使いの 歌のこえもー  
心に近く 聞こゆるなり  
(おりかえし)  
イエスのみうでに そのみむねに  
静かにいこう われはやすし



なんとおだやかで、静けさに満ちた心の状態だろうか、ファニー・クロスビーの心の中は澄み切ってなんの心配も、怒りもありません。そこには主を信じ切った、晴れやかな喜びがあります。

どうしてだろうか!? 日常生活そのものが聖霊に満たされて、サタンのとりつくスキが無いからです。どうして聖霊に満たされているのだろうか? それは救いの第一段階の「新生」を経験したからではないでしょうか。これは神のご計画です。天地が創られる前から神様は我々を選び出し愛して下さいました。

「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」(ヨハネ15:4-5)

同じヨハネで、続けてイエス様は教えられます。 わたしの愛に留まりなさい。

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛にとどまりなさい。わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。」(ヨハネ15:9-10.16)

天におられる主は私たちの心の中にもおられるのです。あのカルバリの十字架で、我々の罪のために死んで下さったイエス様の愛の深さを思うと主を愛さずにはられません。

また、マルコの福音書でもイエス様は唯一の主、主を愛せよと教えています。

〔イエスは答えられた。「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』 第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』 これらよりも重要な命令は、ほかにありません。〕」(マルコ12:29-31)

幸いなことに、聖霊は神の愛を降り注ぎます。ロマ書は教えておられます。

「この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」(ロマ5:5)

穏やかな日々を送りたいと思ってます。(畑中伸之)

**神**様の愛を知った時、私はあえて神様がわたしに艱難や困難を与えて下さる。それは神様が私に懲らしめのため与えてくださるのであって、それで私は成長させていただくのであって、クリスチャンになった時から艱難や困難にあって非常に喜んで迎え入れることができるのです。神様はおっしゃっています。

「あなた方に新しい戒めを与えましょう、お互いに愛し愛なさい」(ヨハネ13:34)

神様や身の周りの人々を愛すれば、愛し合うほど、私は艱難や困難から逃れることができるのだと思います。父なる神をお父様と呼び、子なる神を兄弟と呼べるようになった現在、私たちは愛に満ちた生活を出来るようになったのです。

なんと幸いなことでしょうか。主に感謝せざるをえません。いつも、謙虚な気持ちでお仕え出来ますようお願いいたします。神様ありがとうございました。感謝です。(畑中千恵子)

**1**室の役人はイエスに言った。『主よ。どうか子どもが死なないうちに、下って来て下さい』 50イエスは彼に言われた。『行きなさい。あなたの息子は治ります。』その人はイエスが語ったことばを信じて、帰って行った。……53父親は、その時刻が、『あなたの息子は治る。』とイエスが言われた時刻だと知り、彼自身も家の者たちもみな信じた。」(ヨハネ4:49-53)

解説によりますと、役人自身は、すでにイエスのことばを信じる信仰をもって帰路に就いていました。53節、ここで彼自身が信じたというのはどういう意味でしょうか、とありました。

イエス様のことばを信じて一歩踏み出す時に、イエス様がどのようなお方なのか、よりわかる者となる。そのような信仰者の幸いを私たちも味わいたいと思いますとありました。

私の家族も、病いや事故にあって命の危険にあったことが幾度かありました。その度恐れと不安の中で祈って与えられたみことばは、「恐れなくて、ただ信じていなさい。」(マルコ5:36)でした。イエス様の温かいみことばに励まされてまいりました。なお慕わしく、尊いお方です。そして今、いつも心のうちにあります賛美は、讚美歌494番の1節です。



① わが行く道、いついかに  
なるべきかは つゆ知らねど、  
主はみこころ なしたまわん。  
(おりかえし)  
そなえたもう 主の道を  
ふみてゆかん ひとすじに。



主とともに歩ませていただける日々はなんという幸いでしょう。(福島三弥子)

**あ**なたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」(ヨハネ17:3)

永遠のいのちとは神様とイエス様を知ることであると、イエス様ははっきり言われました。一般の人間が思い浮かべる永遠のいのちと全く違うことが分かります。

イエス様の贖いの十字架を通して受け取る永遠のいのちは、私が知ることも想像することもできないような高い次元の話のように感じられますが、まず信じて受け取って、少しずつでもその輪郭が捉えられるよう学んで行けたらと思います。(永井亮子)

**小**声で文句を言うのはやめなさい。」(ヨハネ6:43)

今回、この御言葉が心にかかりました。自分たちの間で小声で文句を言う、つまりこそこそと仲間内で不満を言い合う。

同調する人を募って、不満の塊を大きくしてしまうのである。残念なことにはいい方に仕向けると言うより、分裂に向かってしまう。

教会の中でも往々にして、御言葉により、建てあげると言うより、不満をこそこそ言うことに熱心な場合もあるのが残念です。

ヨハネ12章5節のユダのように、見せかけの偽善は自分の心の中にもあります。奉仕するとき献金する時、褒められるためではなく、主のためにすると確認しながら、行うようにしています。

6節にあるようにユダは、お金を盗んでいました。悪魔の手先になるような行為をしていて、鶏が鳴く前に決定的にイエス様を裏切る行動にでたのです。お金に価値を見いだす人だったのです。常に自分の心の的が神様に会っているかどうか、日々吟味しながらすごしたいです。

(広瀬裕子)

**予**知、予定、召し、義認、栄化とは以前から聞いてきたところですが、1番初めの「予知」、つまり「あらかじめ知る」という言葉は、単なる「知る」というより、もっと深い意味があり、それは、神が対象とした人に、「特別な関心を寄せて、愛し、特定の事柄を計画しておられる」という意味がこめられているのだそうです。

そこまでの心をもって、私たちを永遠の昔から知っていてくださるとわかると、神に対して、私の側から、より暖かい、より親密な喜ばしい心持で向き合えるような気がします。

次の召しの個所には、「御子を犠牲にしてまで、私たちを愛し、救おうとされていることを認め、受け入れる人を、救いに選んでいてくださった」とありました。

私は長い間、神の選びの基準はなんなのだろうと思ってきましたが、それへの回答を得た思いです。長い間のもやもやが払しょくされて、選び救われたことを素直に感謝できるようにされました。(高橋美枝)

**イ**エスは彼女に言われた。『わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。』(ヨハネ11:25~26)

イエス様は、死人のラザロを生き返らせるだけでなく、マルタの信仰をも導かれました。そして、よみがえり、いのちとなって、わたしたちの救い主となってくださいました。

「あなたは、このことを信じますか」との、イエス様の問いに、素直に「信じます。」と答えたいと思います。(外處トミ)

主イエスは よみがえりです いのちです  
信じる者は 死んでも生きる

2021年12月31日





**心**を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」(申命記6:5)

2022年、新しい一年が始まりました。年月に区切りがあり、新しい区切りを迎えると背筋が伸びる思いがします。新しい年も神様に信頼し、神様とともに生きていきたいです。

主のみこころのうちに歩ませていただけますように。(外處光歩)

**ま**ことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」(ヨハネ12:24)

イエス様によって示された愛の大きさを覚えて感謝します。イエス様の愛といのちを頂いた者として、隣人を愛する歩みをしていけたら幸いです。(外處結実)

**わ**たしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら救われます。また出たり入ったりして、牧草を見つけます。」「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」

(ヨハネ10:9,11)

有名なこの御言葉の解説を読んで改めて感銘を受けました。当時は羊飼いが囲いの入口に立って、中に入れる羊にけががないか、病気でないを確認しつつ、必要に応じて手当をしてゆき、全ての羊が中に入ると羊飼いが自ら入口に横たわって、おおかみや盗人が来ないように自分の全てを捧げて守っていたとのことです。

主イエス様も私たち一人一人がサタンの支配する世界で傷ついていないか信仰が病んだ状態になっていないかを常に確認して適切な処置を行い続けて下さっています。主は愛する者が迷い出た時に、すぐさま対応して下さいます。

そのことから、私たちは主イエス様のもとにとどまって、主だけについて行き、離れずに歩み続けることが唯一の安全で安らかな歩みであることを強く示されました。(外處徳昭)

**わ**たしはいのちのパンです。49 あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

(ヨハネ6:48-51)

48節で、主イエスはこれまで話してきた「いのちのパン」とはご自身のことである、と述べられました。「いのちのパン」とは、食べる人に「いのちを与えるパン」のことです。ユダヤ人たちは、荒野のマナのことを持ち出して、それに匹敵するようすばらしい食物を出してみよ、と主イエスに挑みました。

それに対して、主はそのマナを荒野で食べた彼らの父祖たちは、死んでしまったではないか、と指摘されました。マナはこの世でのいのちを支えていたにすぎなかったのです。食べる者に永遠のいのちを与える力はマナにはありませんでした。

主イエスは、マナと対比して、ご自身のことを「天から下って来たパン」と表現されました。「だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます」というのです。とは言っても、肉体が死

なない、という意味ではなく、天において永遠に生きます、という意味です。仮に肉体が死んでも、体は終わりの日に栄光の体によみがえり、主とともに永遠に過ごすようになるのです。

50節と51節において、主イエスは、ご自身を食することについて繰り返し語られました。いったい、何を言おうとされたのでしょうか。

文字通り、物理的な意味において人がイエスを食べなければならない、というのでしょうか。そのような考えは論外であり、嫌悪すべきものですが、聖餐式で主を食さなければならないことを主がここで教えられた、という見解もあります。何らかの奇蹟的な方法でパンとぶどう酒はキリストの肉体と血に変わるものであり、救われるためには、そのパンとぶどう酒にあずからなければならない、というのです。これはカトリック要理248-270です。

しかし、イエスが言われたのはそのようなことではありません。前後関係から見て、キリストを食する、というのがキリストを信じることである、というの、ははっきりしています。

47節の「まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています。」で確証されます。

主イエス・キリストを救い主として信じる私たちは、信仰によって、主を自分の中に摂取しているのです。主ご自身とのみわざの恩恵にあずかっているのです。アウグスティヌスはこう言っています。「信じたということは食したということである」。

イエスは「生けるパン」です。ご自身が生きておられる、というだけでなく、いのちを分与されるというのです。このパンを食べる者は永遠に生きる。しかし、どのようにしてそんなことが可能なのでしょうか。どのようにして主が、私たち罪人に永遠のいのちを与えることができるのでしょうか。

その答えは、この51節の後半にあります。「わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です」。

ここで、主イエスは十字架上でご自身の死を予見しておられます。主はご自身のいのちを罪人の贖い代として差しだそうとしておられるのです。

主のからだは裂かれ、その血は罪のいけにえとして注ぎ出されることになっていました。主は身代わりとして死ぬことになっていました。私たちの罪の贖いのため、身代わりの刑罰を主は受けようとしておられました。

どうして主はそのようなことをなさるのでしょうか。それは「世のいのちのための」と言われました。私たち世人が救われるため、永遠のいのちを受けるためにそうされたのです。

主が死なれるのはイスラエルの民のためだけでもなければ、選民のためだけでもありません。主の死は全世界を覆うだけの十分な価値がありました。カルバリの主イエスのみわざには、全世界を救うに十分な価値があるのです。

51節で、主は「だれでも……」と言われました。それが誰でも、どんな人であってもよいのです。「だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます」何と幸いなことでしょう。

永遠に生きるのは、ただこのパンを食べる人々だけです。何と感謝なことでしょう。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。

次回はマナ1月号の感想を2月10日頃までに福島兄弟へお寄せ下さい。(永井)